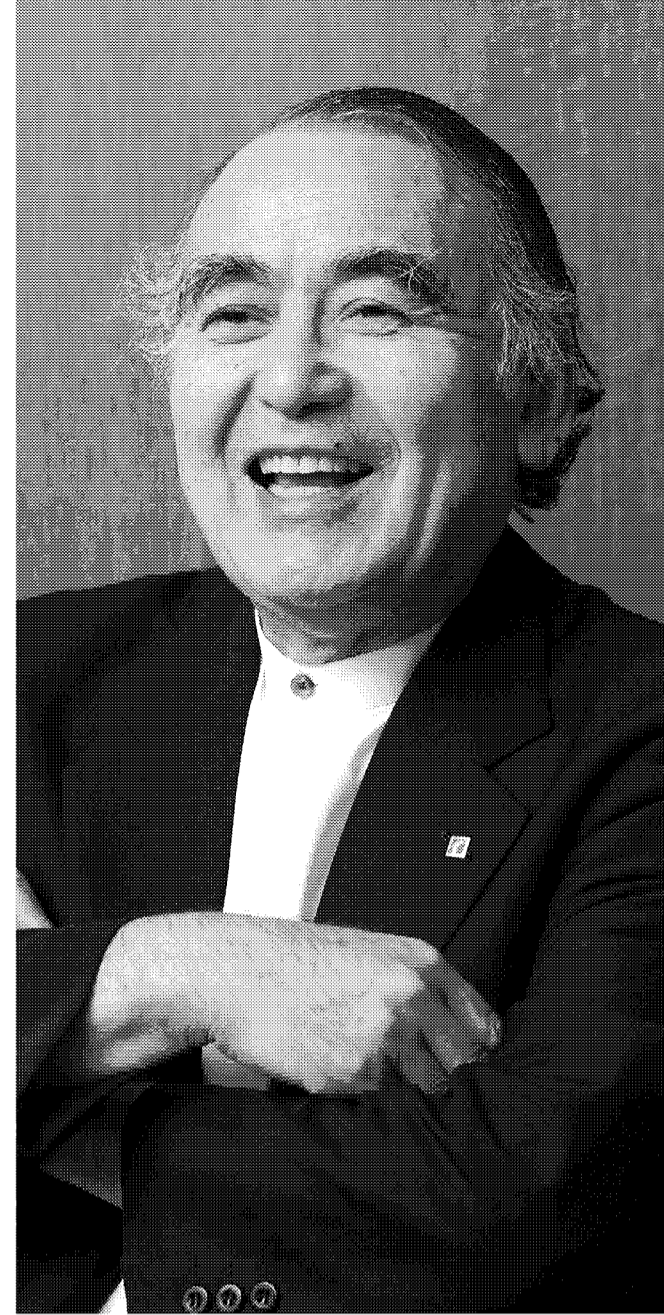


広告特集 企画・制作 朝日新聞社広告局

LEADERS AS READER

リーダーたちの本棚 VOL.42



沢の鶴 代表取締役社長

西村隆治さん

にしむらたかはる

兵庫県神戸市、灘五郷の一つ、西郷に酒蔵を構える沢の鶴。創業は、徳川吉宗が第8代将軍に就任した翌年の享保2(1717)年。西村隆治さんは14代目にあたる。大の読書家で、読むジャンルは日本の古典からマーケティング論まで幅広い。また、5年後に創業300年を控え、自ら「国酒の謎に迫る(仮題)」(経営者・来春刊行予定)を執筆。本書を通して「日本文化としての日本酒への理解を深めたい」と話す。そうした思いにも通じる書について語っていただいた。

無性に心ひかれる日本の古典

日本酒を造る家でも育ったこともあり、日本の歴史に根ざした文化に深い関心を持ってきました。読む本も少く、思い返せばその原点は、子供の頃に親んだ小倉百人一首だったように思います。遊覧から自然と古典文学全般に興味を覚えていきました。高校時代に初めて読んで以来、何度も読み返しているのが「徒然草」です。下部(吉田)兼好が、

歌が大好きなものです。藤原定家や寂蓮など、言葉遊びを極めた同時代の歌人の歌と比べると、心の苦痛や孤独と向き合った西行の歌は異質です。これについて小倉は「定家や寂蓮の歌など西行の歌に及ぶべくもない」と断言します。そして、「西行は遂に自分の思想を見定め得なかった。併し、彼にしてみれば、それは、自分の肉体の行方をはっきりと見定めた事に

も同じ趣旨で活動しています。日本文化と日本酒の発展のためにも、宴の始まりは「日本酒で乾杯」といいたいです。最後は、経営の参考になった本を紹介し「人間の魅力の研究」伊藤肇著「日本経済新聞社」は、明の学者、呂新吾が著した「深沈厚重」福澤家雄「聡明才弁」という人物魅力を土台に古今東西の偉大な人間の魅力を迫る名著です。「ビジネス・インサイト」創造の知とは何か(石井淳成著)岩波書店は、革新的なビジネスモデルの多くは「閃き」による大胆な仮説と立案に基づくこと、実例を考察しています。その実例にも出てくる「クロネコヤマト」の宅急便の生みの親小倉昌男さんの自伝「小倉昌男」経営学は、数々読んだ経営書の中で心に残った一冊です。民間初の個人向け小口貨物配送サービスが軌道に乗るまでの経緯、スキー宅急便など画期的な商品が生まれた背景など、興味深く読みました。私なりに小倉さんを評すると、正直で人がいい、人を育てられる、よく学ぶ、システム構築ができる。私財を投じて福祉財団を設立されたこともすばらしい。後継者問題は「金を残すは下、仕事を残すは中、人を残すは上」と言ったそうですが、小倉さんは仕事と人を残されました。我が身を顧みると、残した仕事はそれなりに思い浮かびますが、人を育てたという点に関しては「なる姿を見て察し」というタイプで、丁寧で残った気がしています。今は反省して、人を残せるように心がけています。

文化「悟り」「人を残す」我がテーマを本に求めて

「輝く知性をもつて奔放に筆を進めたこの随筆集は、人生訓としても社会評論としても一級だと思えます。第八十五段の、「偽りでも賢を学ばんと賢といふふし」という文など、実に深い。この段では、善事をまねると、悪事をまねるから人間の価値は決まる、ということも語っています。鎌倉期の世相を映すエピソードが満載で、そこはかとないおかしみを感じられるのも「兼好節」の魅力です。

他ならなかった」と指摘します。要するに、西行は悟りを開けなかったと、自分がなぜ西行の歌にひかれるのか、改めてわかった気がしました。他の項も梗概をさまざまな話題が取りあげられ、読みごたえ十分です。

宙視と現代の自然科学や物理学との符合にふと気づかされる、奥の深い一冊です。次は神崎宣武先生の「酒の日本文化」です。日本の歴史において、酒がどのように貴重なものであったか、神事においての役割や、酒を担った人、ことごとくをくわしく紹介する書です。私が常々残念に思うのは、官中晩餐会などの公式行事における「乾杯」の酒がシャンパンであることです。日本酒は、日本人が誇りとすべき伝統的な「国酒」であり、本書の内容のように、文化としての日本酒への理解を促す必要性を感じています。日本酒愛好者を会員とする「日本酒で乾杯推進会議」の運営委員長を務めています。ここで

宙視と現代の自然科学や物理学との符合にふと気づかされる、奥の深い一冊です。次は神崎宣武先生の「酒の日本文化」です。日本の歴史において、酒がどのように貴重なものであったか、神事においての役割や、酒を担った人、ことごとくをくわしく紹介する書です。私が常々残念に思うのは、官中晩餐会などの公式行事における「乾杯」の酒がシャンパンであることです。日本酒は、日本人が誇りとすべき伝統的な「国酒」であり、本書の内容のように、文化としての日本酒への理解を促す必要性を感じています。日本酒愛好者を会員とする「日本酒で乾杯推進会議」の運営委員長を務めています。ここで

新たなニーズをつかみ日本酒再興へ

日本酒の市場は、長く低迷が続いている。国税庁の調査によると、1973年のピーク時に比べて約4割まで減少。若者を中心に低アルコール志向、ワインや焼酎の人気の定着など、ニーズの変化にいかに対応しているかが業界全体の課題になっている。そして、中、沢の鶴は、画期的な商品を生み出した。「米だけの酒」旨みそのまま10・5という純米酒。アルコール度数を従来の清酒より低い10・5度に抑え、女性や高齢の日本酒愛好者も気軽に楽しめるとして、ファンを広げている。「日本酒を飲まない方に理由を聞くと、『酔いやすいから』という答えが多く、どうにか解決できないかと考え

たのです。低アルコールと日本酒独特のうまみを両立させるために、試行錯誤を繰り返して、こうして通常の2倍以上の使用量によって実現しました。一昨年の発売開始以来、同商品の売上高は、前年比倍増のペースで伸び、全日本国際酒類振興会主催の第32回「11年春季」全国酒類コンクール「新開発酒部門」で第1位に輝いた。

革新的な商品を生み出す内規「新」を開拓する一方で、時間をかけて仕込む伝統の技法「生も造り」を現代に復活させるなど、300年続いた老舗らしい酒造りも光る。また、海外展開にも積極的だ。日本市場とは反対に、海外では日本酒「ニ」がブームになっている。「海外市場は価格競争の極端を呈していますが、品質重視でファンを増やしていきたい。現地の方に味わい、楽しみ、造り方を歴史などを知って、いいただき、日本文化としての日本食に力を入れています。」

「震災」は、酒蔵7蔵を含む二十数棟が全壊、江戸川に建築された貴重な木造蔵も廃土化した。「がれきの山を目にし、思わず『無残と言ったも思わぬ』とつぶやいて、先代と意見を交換して決めた社訓は「信義誠実(創意努力)協力親和」の銘であり、経営指針でもある。



1945年生まれ。大阪府出身。67年京都大学法学部卒。73年同大学院法学研究科博士課程修了。同年文部省京都大学法学部助手、74年同大学法学部助手、78年常務取締役、84年から現職。84年から灘五郷酒造組合理事長。02～10年兵庫県酒造組合連合会会長・日本酒造組合中央会近畿支部長、02年から日本酒造組合中央会理事長。06年から日本酒で乾杯推進会議運営委員会委員長。

朝日新聞社広告局ウェブサイトでは、西村隆治さんが語るリーダー論を紹介しています。http://adv.asahi.com

西村隆治さんがすすめる5冊
『小倉昌男 経営学』(日経BP社) 小倉昌男著
『酒の日本文化 知っておきたいお酒の話』(角川学芸出版) 神崎宣武著
『いのちの力』(春秋社) 中村公隆著
『栗の樹』(講談社) 小林秀雄著
『徒然草』(岩波書店) 西尾実 安良岡康作・校注

三笠書房 千代田区飯田橋3-3-1 http://www.mikasashobo.co.jp
吉越浩一郎 新刊&ロングセラー
必ず頭角を現す社員 45のルール
仕事にもっとハングリーになれ!
一流の男、一流の男
『なせ働くのか』『いかに働くのか』
『働きの方』 稲盛和夫
『死ねばど働いて損があるか!』 嶋津良智
『死ねばど働いて損があるか!』 嶋津良智
『死ねばど働いて損があるか!』 嶋津良智
『死ねばど働いて損があるか!』 嶋津良智